

〔共同研究：大学教育における映像・メディア教育モデルの構築（Ⅱ）〕

ポスト真実の時代のメディア

——社会システム理論から見たインターネット¹⁾——

名 部 圭 一

1 ポスト真実の時代とインターネット

■ ポスト真実とトランプ現象

2016年末、イギリスのオックスフォード大学出版局は「今年の言葉」として「ポスト真実 (post-truth)」を選出した。ポスト真実とは、「世論形成において客観的な事実よりも感情や個人的な信条にアピールする方がより大きな影響力をもつような状況と関わる、あるいはそうした状況を示す」という意味の形容詞である。この年、大方の予想を裏切り、ドナルド・トランプ氏がアメリカ大統領選に勝利を収め「トランプ現象」とまで言われたが、この選挙期間中に「ローマ法王がトランプ氏を支持」や「ワシントン DC のピザ屋でクリントン氏が児童虐待をしている」といったまったく事実無根の情報がインターネットで飛び交った。このような事実に反しても人びとの感情に強く訴えかける情報によって世論が作られ、ひいては社会に大きな影響を与える状況、それがポスト真実である。トランプ現象は私たちがポスト真実の時代にいる（あるいはそこに入りつつある）ことを象徴する出来事なのかもしれない（池田 2017）。

しかしこうした時代診断について、次のような疑問を抱く向きもあるだろう。事実ではない感情を刺激する情報によって人びとが踊らされるといった状況は、なにも近年になり急に生じた現象ではなく、私たちはもっと前からポスト真実の時代を生きてきたのではないか。そもそも「真実の時代」など存在したのだろうか、と。たしかにマスメディア研究の歴史を紐解いてみると、アメリカのジャーナリストであるウォルター・リップマンは文字や映像を媒介にして構成された世界を「擬似環境」と呼び、こうした環境に生きる人たちはステレオタイプや偏見に支配されやすく、またマスメディアは非合理的な感情へとアピールするため、民衆を理性的な判断を行う「公衆」から一時的な感情に流されやすい「大衆」へと変質させることを憂慮していた（Lippmann 1922=1987; Lippmann 1925=2007）。さらにメディア史

1) 本稿は、15共246「大学教育における映像・メディア教育モデルの構築（Ⅱ）」の研究成果の一部として発表するものである。

キーワード：ニクラス・ルーマン、ポスト真実、情動社会、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア、バイナリー・コード

研究者の佐藤卓己は、日本では戦前まで尊重すべき公論である輿論（よろん）と暴走を阻止すべき私情である世論（せろん）は意識的に区別されていたが、戦後「輿」の字が当用漢字からはずされ「世論（よろん）」に統一されることで、社会情勢は公的な意見よりも大衆の気分左右されやすくなったと言う（佐藤卓己 2008）。

■情動社会とインターネット

これらの指摘を踏まえると、「現代はポスト真実の時代である」との時代診断は拙速かつ近視眼的な判断であり、「ポスト真実」という言葉そのものが一種のバズワード（一見もっともらしいが意味や定義がはっきりしない流行語）であると言えなくもない。しかしながらわれわれは、それでもなおポスト真実という言葉がいま起りつつある社会変化の少なくとも「一端」を適切に示していると考え。ここで言う社会変化とは、一時的な集合的感情が社会に影響を与える度合がかつてないほど高まり、しかもそのことが顕在化（可視化）しているという事態である。そしてこのような変化をもたらすのに大きな働きをしているのがインターネットというメディアにはかならない。

アメリカの法学者キャス・サンステインは、インターネットで流された情報に対して多くの人の共感が集まることで、同種の情報が雪だるま式に増加し、ときに極端な言動へと収斂していく現象をサイバー・カスケードと呼んだ（Sunstein 2001=2003）。これはインターネットが普及し始めた比較的初期の段階で指摘された現象だが、SNS 隆盛の今日においてもこうした現象は衰退するどころか、いわゆる「ネット（ウェブ）炎上」としてよりその勢いを増しているように思える（田中・山口 2016）。哲学者の大黒岳彦は「SNS 上で生じているコミュニケーションのほとんどは「意見」の「発信」からは程遠い、情動の爆発・共鳴・伝染である」とし、情動露出（exposure）によって駆動されるようになった（情報）社会を「情動社会」と呼んでいる（大黒 2016：115-6）。ポスト真実の時代とは社会が情動化の色合いをよりいっそう濃くした時代である。

われわれはこれよりポスト真実の時代の情動社会の理論的分析を試みるが、ここで採用される理論はドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの社会システム理論である。ルーマンの理論はわが国の理論志向の強い研究者の多大な関心を惹き、1990年代半ばから後期の著作が続々と翻訳されるとともに、詳細な学説研究も蓄積されつつある（馬場 2001；長岡 2006；佐藤俊樹 2008）。しかしそのあまりにも高い抽象性に加え、ルーマン独特のターミノロジーが頻出することから²⁾、多くの研究者が参照する社会理論として広く受け容れられているとはとても言えず、またルーマンの理論を応用する試みもいまだ少ない。ここではルーマンの社会システム理論を、情動社会を駆動するモーターであるインターネット・コミュニケーションの分析に適用する。ルーマン理論の抽象性は、インターネットという抽象的なコミュニケー

2) Baraldi, Corsi und Esposit (1997=2013) は、こうした「ルーマン語」を解説した用語集である。

ション・システムを適切に理解することへと貢献するはずである。

2 ルーマンの社会システム理論

■秩序問題

本節ではルーマンが展開した社会システム理論の概要を解説する。この理論は、理論社会学の根本問題である「秩序問題 (order problem)」に対して答えようとする試みから彫琢された。

社会学の歴史で秩序問題を明確なかたちで提起したのはアメリカの社会学者タルコット・パーソンズである。パーソンズは最初の著作である『社会的行為の構造』(Parsons [1937] 1968=1976-1989)において、孤立した行為者が自らの利得を最大にすべく効率的・合理的に振る舞った場合、社会は「万人の万人に対する闘争状態」(ホップズ)、すなわち一種の無秩序状態に陥るほかないとし、この問題を解決することこそが(理論)社会学の課題であるとした。パーソンズ自身による解答は、簡潔に言えば、「社会秩序は行為者が価値を共有することにより可能になる」というものであり、この解答は価値共有テーゼと呼ばれている。

ルーマンはこうしたパーソンズによる秩序問題の解決は社会的には不適切であるとして斥ける。パーソンズの解答の何が問題なのであろうか? 「社会秩序は行為者が価値を共有することにより可能になる」というテーゼが意味しているのは、具体的に言えば、行為者が「知人と会えば挨拶するのは良きこと」という価値(ルール)を内面化することで、挨拶を交わすという相互作用(秩序)が可能になるということである。しかしながら行為者の見地からは、他者がこうした価値を有しているかはつねに不確実である。私たちは相手が「知人と会えば挨拶すべし」というルールを知っているかを互いに確認してから挨拶したりはしない。価値やルールを共有しているかはわからない状態のなかで「おはよう!」と声をかけ、相手も「おはよう!」と返してきたら、事後的に「挨拶するのは良きこと」という価値(ルール)を共有していることに気づくにすぎないのだ。つまり、価値共有は行為者の内面を見通すことができる(神のような)超越的な視点からしかわからず、したがって行為者にとって価値共有は行為の動機づけとはなりえないということである。

パーソンズによる秩序問題に対する解答の決定的な誤りは、この問題を(社会的にはではなく)心理(学)的に解決しようとした点にある。価値共有テーゼは、価値が共有され複数の行為者の内面(心理)に同一の価値観が形成されると社会秩序は可能になる、と言い換えられるが、これは実質、社会秩序を行為者の内面(心理)によって基礎づけようとする試みにほかならない。ルーマンによると、心理システムを構成する要素は「思考」である。もちろん思考は行為者の相互作用を触発する——喫茶店に入ったら「あっ、知り合いの〇〇さんがいる!」と思いをかけ会話が始まるといったように。しかしながら、自己と他者との相互作用において互いの思考内容が取り交わされるなどということはけっして起こりえない。両者の思考はいわばブラック・ボックスであり、「二つのブラック・ボックスは、どんなに

努力をしてもまたどれだけ時間をかけても、互いに相手を見通しえないままなのである」(Luhmann 1984=1993-1995: 168)。

■コミュニケーション・システムとしての社会

このようにルーマンは、パーソンズは秩序問題の解決を心理システム（思考）の水準で図るものであり、社会学的な解答としては不適切であると批判する。秩序問題は社会学の問題なのだから、その解決は社会の水準に求めないといけない、というわけである。では、秩序問題にふさわしい水準であるとされる社会はいったい何によって作り出されているのだろうか？ 言い換えれば、思考を構成要素とする心理システムとは区別された社会システムの構成要素は何か？

ルーマンによれば、社会システムを構成する要素はコミュニケーションである。そしてコミュニケーションは情報、伝達、理解という三つの選択過程の総合であると言う(Luhmann 1984=1993-1995: 219)。シンプルな規定ではあるが、あまりにも抽象的であろう。具体的に考えてみよう。

ある男性が思いを寄せる女性に「告白」するという場面を例にとると、彼が彼女に話すテーマはさまざまありうる。明日の天気かもしれないし、今夜のプロ野球の結果かもしれないし、芸能人のゴシップ話かもしれない。これらのなかから「私はあなたのことが好きなので、付き合ってほしい」というテーマを選ぶ。これが情報の選択である。次に、こうして選ばれた情報をどのように伝えるかという次元の選択がある。会って口頭で伝えるか、電話をかけるか、メールを書くか——さまざまな伝達方法から一つを選ぶ。情報の選択と伝達の選択、これらはいずれも情報の送り手側（男性）の選択である。

これに対して、送られてきた情報を受け取る側の選択がある。「僕と付き合ってくれない？」というメールを受け取った女性は、この申し出は本気なのだろうか、ひょっとしたら冗談で言っているのではないかとしばしば思い悩む。これが理解の選択である。冗談であると理解した彼女は、今度は情報の送り手側になり「〇〇くん、どうしたの？ 酔っ払っているの？」とメールを返す。告白が失敗したと理解した彼は、彼女に電話をかけ「いや、酔ってないよ。本気で言ってるんだ」と真意を伝えようとする。これを受けて彼女は……。

ルーマンがいう、情報、伝達、理解という三つの選択過程の総合としてのコミュニケーションとは、具体的にいえばこのようなものである。コミュニケーションをこのように捉えることのメリットは、社会システムを心理や意識の次元に還元することを回避できる点にある。コミュニケーションはときに「意思疎通」と訳されたりもするが、ルーマンの考えからすると、コミュニケーションにおいて行為者の意思や意図が伝達されるなどということはありえない。皮肉のつもりで言った言葉が伝わらず字義通りに理解されたり、逆に、たんに寝不足のせいで出たあくびが「この講義は退屈である」という情報を伝えていると理解されるなど、意図を基準にするとコミュニケーションにおける理解は「過少」であったり「過剰」であっ

たりする。しかしこうした評価は思考を構成要素とする心理システムの観点からなされたものであり、社会システムとは無関連である。社会システムの観点からすると、行為者の意図がどうであれ、情報、伝達、理解という三つの選択が観察できればそれで十分なのである。

こうしてコミュニケーションに対してさらなるコミュニケーションが接続し、このコミュニケーションにさらなるコミュニケーションが接続し……といった具合にコミュニケーションの連鎖が続き、これが社会システムの秩序を構成する。あくまでもコミュニケーションがコミュニケーションを生み出すのであり（社会システムのオートポイエーシス）、人間がコミュニケーションを生み出すわけではない。人間は社会システムの環境（外部）に属するのだ。社会とはコミュニケーションの連鎖から成る閉じた自律的システムなのである。

3 ルーマンの近代社会論

■象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア

前節で、ルーマンが社会システムの構成要素であるコミュニケーションを三つの選択の総合、すなわち情報、伝達、理解から成る統一体として把握したことを確認した。「コミュニケーションは、理解が成立したばあいに、またそうしたばあいにかぎって実現されるのである」（Luhmann 1984=1993-1995: 230）。だが、問題はこれで終わらない。次なる問題は第四の選択にかかわる。すなわち伝達された情報の意味を理解した受け手が、そうした情報を自らの行動の前提として受容するのかそれとも拒否するのかという選択の問題である。

AさんがBさんに対して「この文書を明日までに100枚コピーしておいてください」というメールを送ったケースを考えてみよう。Aさんはさまざまな情報のなかから「100枚コピーのお願い」という情報を選択し、それをメールにより真面目な文体で伝える（伝達の選択）。これを受け取ったBさんは、これは冗談でも間違いでもなく自分に向けられた命令であると解釈する（理解の選択）。ここで問題となるのは、Bさんがこの命令を受け容れ、明日までに100枚のコピーをとることはどれほど確かなのかという現実性の問題である。行為者の立場から言い換えれば、Bさんはなにゆえこの命令を受け容れるのか、という動機づけの問題である。

ルーマンはこうした問題をコミュニケーションにおける「成果」の不現実性として捉えている。いま挙げたようなケースで、AさんとBさんがお互いまったく知らない人同士であったとしよう。Aさんの命令をBさんが受け容れるなどということは、およそありそうもない（不現実な）事態であると言わねばならない。では、AさんはBさんの上司、BさんはAさんの部下という間柄であったとしたらどうか。Aさんの命令をBさんが受け容れコピーをとる可能性は、飛躍的に高まるはずである。このように理解が成立してコミュニケーションが実現したとしても、相手が受け容れるかどうかはまた別の事態であり、この受容の可能性にかかわる問題が成果の不現実性である。

ルーマンによると、この成果の不現実性という問題に対処するため、社会はその進化の過

程で特殊なメディアを発展させてきた。それが象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアである (Luhmann 1984=1993-1995: 254)。こうしたメディアは、コミュニケーションにおける受容というおよそありそうもない事態を、「ありそうなこと」「確実なこと」へと変換させる働きをもつ。ルーマンは象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアの例として、貨幣、愛、真理、権力などを挙げている。買い物をするとき貨幣を差し出せば受け取ってくれることはほぼ確実であるし、恋人に「来週、いっしょに映画を見に行かない？」と誘えば受け容れられる可能性は高いだろうし、「地球は太陽の周りを365日かけて回っている」との説を受け容れるのはそれが科学的真理であるからだ。さきほど挙げた例で、AさんがBさんの上司であれば、Bさんはその命令を受け容れる可能性が飛躍的に高まると述べたが、これをメディア論の文脈で言い換えると、両者のあいだに象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアとして権力が作用しているがゆえに、受容の可能性が高まったということになる。

■機能分化とバイナリー・コード

このように、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアは、伝達された情報を理解した行為者にそれを受容するよう動機づける働きがあるわけだが、貨幣、愛、真理、権力といった各メディアが作用する社会的領域は限定されている。貨幣はもっぱら市場にかかわり、貨幣メディアが作用する領域は経済システムを構成し (Luhmann 1988=1994)、愛が作用するのは親密な人間関係であり、このメディアはとくに結婚と深いかわりをもつ (Luhmann 1983=2005)。同様に、権力が作用する領域は主として政治システムであり (Luhmann 1975=1986)、真理メディアがかかわるのはもっぱら科学 (学問) システムである (Luhmann 1990=2009)。各メディアはそれに対応する各システムにおいてのみ作用しその意味で自律的に閉じている。こう述べると、貨幣はどうなのか。それは社会のいたるところに不当なまでに浸透している強力なメディアではないのか、との反論があるかもしれない³⁾。たしかに貨幣は生活に必要な物資やサービスが次々と商品化される資本主義社会において、広範囲に作用するコミュニケーション・メディアである。しかしこのメディアが経済システムの外部で作用することはない。貨幣で恋人や科学的業績を買うことはできないのである。

こうしてコミュニケーション・メディアが分出するとともに、社会システムはその機能に応じて複数の自律的なサブシステムへと分かれていく。このサブシステムの機能分化こそが、ルーマンにとって近代社会とそれ以前の社会を分かち最大のメルクマールとなる。近代社会は、さきに挙げた政治、経済、科学 (学問) 以外にも法、教育、宗教、芸術などさまざまな

3) こうした状況を「システムによる生活世界の植民地化」と呼び、近代社会を批判したのがドイツの哲学者ユルゲン・ハーバーマスである (Habermas 1981=1985-1987)。ルーマンは1960年代末に行われたハーバーマスとの論争によりその名を高めたが、当時から両者の社会の捉え方は大きく異なり、このことは近代社会に対する評価の違いにもつながる (Habermas/ Luhmann 1971=1984-1987)。

領域に分かれ、それぞれがサブシステムを構成する。そして各システムは、象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディアとともに、それぞれのシステムに固有のバイナリー・コードを作り出し観察を行う。科学（学問）システムは「真／非真（偽）」というバイナリー・コードを用いて観察を行い、法システムは「合法／不法」というバイナリー・コードによって、宗教システムは「超越／内在」という観点から観察を行う。各システムは固有のバイナリー・コードにのみ基づいて観察し反応を示し、そこに別のコードが入り込む余地はない。たとえばある会社の役員が政治家に賄賂を贈っていたことが発覚したとすれば、貨幣をメディアとする経済システムは「支払い／不支払い」というバイナリー・コードにより観察を行い、売りが殺到することでその会社の株価は急落するだろうが、このシステムにとって「合法か不法か」や「真か偽か」という区別は無関連である。

機能分化の徹底とそれにとまなうバイナリー・コードの分出により数多くのサブシステムへと分岐した社会、これがルーマンの描く近代社会像である。こうした社会では、ある現象が複数の観点（バイナリー・コード）から観察されるため、当然、一義的なものではなくなる。地球温暖化という現象を一つとってみても、経済システムが観察すれば、企業は「二酸化炭素排出量を制限すると減益になるのではないか」と危惧を抱き、政治システムは「地球にやさしい政党」を掲げ次の選挙で勝つための絶好のチャンスと捉えるかもしれない、科学システムは「地球温暖化は二酸化炭素の大量排出が原因なのか」あるいは「そもそも地球温暖化は本当に起こっているのか」と疑うかもしれない。このようにそれぞれの認識は各サブシステムの観察と相関的にしか生み出されえず、これらの観察を超越した「本当の实在」などというものは存在しえない。また、全体社会のなかで他のサブシステムよりも優位に立つサブシステムも、各サブシステムの観察を統合する特権的なサブシステムも存在しない。近代社会とは、中心も頂点もない複数の自律したサブシステムがフラットなかたちで並存する社会なのである。

4 マスメディアとインターネット

■ マスメディア・システムと真実の時代

ルーマンは晩年、マスメディアを社会システム理論の観点から記述・分析するという課題に取り組むようになる。その成果の一つとして刊行された著書が『マスメディアのリアリティ』（Luhmann 1996=2005）⁴⁾である。ルーマンの手にかかるとマスメディア・システムはどのように捉えられるのであろうか？

前節で見たように、近代において機能分化した複数のサブシステムは、それぞれのシステムに固有のコミュニケーション・メディアもしくはバイナリー・コードを分出する。マスメディア・システムの分析においてもこの考え方は一貫している。ルーマンによると、「マス

4) この著書は1994年7月13日にデュッセルドルフ市で行われた講演に基づいており、初版が1995年に出され、1996年に大幅に改稿された第二版が刊行された。

メディアというシステムのコードは、情報と非情報の区別である」(Luhmann 1996=2005: 30)⁵⁾。ルーマンのこの明言を受けて、なかには次のような疑問を呈する人もいるかもしれない。ルーマンは社会システムの構成要素をコミュニケーションであると主張し、コミュニケーションを情報、伝達、理解という三つの選択の総合として捉えた。だとすれば情報の選択は社会システム一般に当てはまる事柄であり、たとえば友人と対面的状況下で会話をするといった相互作用においても情報の選択は行われているのだから(どういう話題を提供すれば会話がはずむだろう)、情報/非情報の区別はなにもマスメディア・システムに固有のバイナリー・コードであるとは言えないのではないか。

こうした疑問はたしかにもっともなものである。しかしバイナリー・コードとしての情報/非情報と言われる際の情報とは、情報一般ではなく、より限定された意味合いで使われていることに注意しなければならない。ごく普通の学生であるAさんが昼食にカレーライスを食べたとする。たしかにこれも情報になりうるが、当然のことながら、こうした情報をマスメディアが伝達することはありえない。これに対して、来日中のアメリカ大統領が日本の首相と昼食にカレーライスを食べながら会談したとなれば、これはその日のちょっとしたニュースとして新聞、テレビなどのマスメディアによって報道されるであろう。Aさんが昼食にカレーライスを食べたことは、マスメディア・システムにとって非情報であり、アメリカ大統領が食べたことは情報なのである。つまり、マスメディア・システムのコードである情報には、「時事性」「意外性」「新奇性」「規則違反」といった特性が含まれていなければならない、こうした特性をより多く含むにつれ情報の価値が上昇するのである。

これらの特性を基準にしながら情報/非情報の区別を行っているマスメディアのプログラム、それがニュースとルポルタージュである⁶⁾。ニュースは英語でいえば new という形容詞を語源にして生まれた言葉であることからわかるように、「新しい」ということを本質的な価値としている。古くなった情報、既知の情報は非情報として扱われ、マスメディア・システムにおいて伝達されることはない。新聞社や放送局はたえず新しい情報を求めているのだ。しかしながら、「新奇性」や「時事性」といった基準はマスメディアが情報を区別する際の必要条件ではあるが、この基準だけを満たしていればニュースとして伝達されるわけではない。この基準にはある重要な制約がある。それはニュースとして伝達される情報は「真実」でなければいけない、ということである。報道機関が誤った情報や虚偽情報を報道したことが発覚すれば、番組が中止になったり雑誌が廃刊になったりするほどの致命的なダメー

5) こう言われると、当然、ではマスメディア・システムのコミュニケーション・メディアは何なのかという問いが浮上する。しかし残念なことに、ルーマンはこの問いに対して明確な答えを出していない。大黒はマスメディアに関する数々のルーマンの論文・著作を検討することで、それは「世論」であると結論づけている(大黒 2006: 325)。

6) ルーマンが言うプログラムとは(テレビやラジオの)「番組」のことではない。バイナリー・コードを実際に適用する際、A/非Aという区別の具体的内容を決定する基準となるのがプログラムである(Luhmann 1984=1993-1995: 589)。マスメディア・システムのプログラムとして、ルーマンはニュースとルポルタージュ以外に、広告とエンターテインメントを挙げている(Luhmann 1996=2005: 70-96)。

ジを受ける。いくら目新しく時宜にかなった情報であったとしても、真実ではない情報は伝達してはならない。それほどニュースとルポルタージュにとって真実／非真実という基準は絶対的なものである。

ここで誤解がないように付言しておく、ニュースとルポルタージュにおいて情報と非情報を区別する絶対的な基準として真実／非真実というコードが敷かれているということは、新聞に書かれていることがすべて真実であるとか、新聞の読者がそこに書かれていることをすべて真実として受容していることをいささかも意味しない（前節で述べたコミュニケーションにおける理解と受容の区別を想起すべし）。新聞が誤った情報を載せることは少なくないし、新聞記事を疑っている読者もいるだろう。しかし〇〇新聞に書かれていることは嘘ばかりだと立腹している人がいたとしても、真実／非真実というコードは生きている。なぜならその人は「新聞は真実を報道すべき」という「規範的予期（期待）」があるがゆえにそうした態度をとっているのだから⁷⁾。したがって新聞、雑誌、放送といったニュースとルポルタージュをプログラムにしているマスメディアは「真実の時代」を象徴するメディアであると言える。

■ インターネット・システムのバイナリー・コード

ルーマンは膨大な数の著書と論文を残し⁸⁾、1998年にその生涯を閉じた。90年代の後半といえば、1995年にマイクロソフト社のOS（オペレーション・システム）であるWindows95が発売されたのを機に、インターネットがしだいに私たちの生活へと浸透しつつある時代であった。大黒は「ルーマンは、インターネットという新しい〈メディア〉の登場を目の当たりにして、〈次〉なる社会構造、すなわちポスト「機能的分化」構造の胎動を予感したはずである」（大黒 2016：153）と言う。しかし残念なことに、ルーマンが社会システム理論の観点からインターネットを分析することは、時間が許さなかった。われわれはこのルーマンがやり残した課題を引き受け、社会システム理論を適用してインターネットがどのような特徴をもつコミュニケーションなのかを明らかにしたい。

インターネットのコミュニケーションを全体社会のサブシステムとして分析しようとするなら、当然、このシステムで働くバイナリー・コードは何であるかが問われなければならない。われわれはインターネット・システムのバイナリー・コードは「接続／非接続」であると考え⁹⁾。ここで言う接続とは、伝達された情報に対してなんらかの反応（レスポンス）

7) 規範的予期とは予期はずれが生じたとしても、学習を行わず元の予期内容を変更しない予期をいう。これに対して、予期はずれが生じると学習し予期内容を変更する予期を認知的予期と呼ぶ。規範的予期が制度的に体系化されたものが法である（Luhmann 1972=1977）。

8) 著書は80点、論文は400点を数える。

9) 社会学者の北田暁大は、ルーマンの社会システム理論を援用しながら、公共性志向のコミュニケーションのモードを「秩序の社会性」、接続志向のコミュニケーションのモードを「つながりの社会性」と呼び、後者はインターネットや携帯電話のコミュニケーションに見られる特徴であると言う（北田 [2002] 2011：138-41）。しかしルーマンの考えを厳密に適用すると、社会システムはコミュニケーション

を誘発する作用を意味する。このコードの特質を明らかにするために、マスメディア・システムのコミュニケーションと対比してみよう。

マスメディア・システムにおいては「情報／非情報」というバイナリー・コードによる観察が行われ、新奇性や時事性をともなう情報が伝達されるわけだが、受け手がそうした情報をどのように理解しているのかを送り手が把握することは難しく、把握できたとしてもそれには大幅な時間を要する。このシステムの受け手は送り手と情報が伝達される時空間（コンテキスト）を共有しない不特定多数であり、また情報に対する反応を即座に示すことができないからである¹⁰⁾。だが、こうしたマスメディア・システムの特徴は、コミュニケーションの「接続」という点ではむしろ有利に働く。というのも送り手は受け手が情報を正しく理解しているか、好意的に受け止めているかといったことを気にすることなく、次々と新しい情報を伝達することができるからである（名部 2008：133-4）。つまり受け手の理解が不確かであるがゆえに、「マスメディア・システムはコミュニケーションの接続の連鎖を途切れさせることなく存続を維持できる」（大黒 2006：322）のである。このようにマスメディア・システムにおいては、コミュニケーションの「接続」が問題として顕在化することはない。

これに対してインターネットにおいては「いかにしてコミュニケーションを連鎖的に接続させるのか」という問題が顕在化する。たとえば「2ちゃんねる」のようなネット掲示板に書き込みをするといったケースを考えてみよう。最初にスレッドを立てるときに最も重要なのは、次の書き込みを誘発するような書き込みをしなければならない、ということである。後続の書き込みがなされないと、書き込みの連鎖を構成要素とするというネット掲示板の特質上、そのスレッドは（ひいては掲示板そのものが）死んでしまうことになるからだ。インターネットにおいて「接続」がクリティカルな問題として浮上するというのは、このような意味である。

そう考えるとインターネットのコミュニケーションは、会話のような対面的な相互作用と似た特質を有していることが見えてくる。マスメディア・システムにおいて重要なのは情報の価値であった。人びとの興味関心をそそるような情報を次々と伝達することこそがマスメディアの働きである。これに対して対面的状況下の相互作用においては情報の価値は相対的に低下するとともに、伝達の価値が上昇する。なぜなら、そうした状況では「何も言うことがなくても、何かを話さなくてはならない」（Luhmann 1996=2005: 31）からである。会話

ンの連鎖的接続によって秩序を構成しているのだから、つながりの社会性は全体社会のあらゆるサブシステムを貫通する特徴であるはずだ。問題は秩序／つながりの区別ではなく、社会システム一般に接続への志向があることを押さえた上で、インターネットに固有の接続のモードとは何かを明らかにしなければならない。

10) 近年急速に広まったツイッターなどの SNS と連動したテレビ視聴（ソーシャル・ビューイング）はこのような状況を変えつつある。しかしながら、参加者の相互モニタリングによりコミュニケーションの軌道修正が可能な相互作用とは異なり、マスメディア・システムの場合、送り手がツイッターのつぶやきを見て即座に番組内容を大幅に変えるなどということは、事前収録の番組はもちろん、生放送であったとしても、きわめて難しい。

が途切れてしまい気まずい思いをしたという経験は誰にでもあるだろう。会話のような対面的相互作用にあっては、情報の内容は何であれ、とにかく伝達し続けること、言い換えれば接続の連鎖を絶やさないことこそが、このコミュニケーションにとって最も重要なことなのである。

■ インターネット・システムの情報選択

だとすればインターネット・システムは、会話のような相互作用と同質のコミュニケーションと見なしてよいのか？ 接続志向のコミュニケーションの特殊形態がインターネットなのか？ たしかに接続（伝達）の問題は顕在化するという点でインターネットと相互作用は共通点をもつ。しかし情報価値という観点から見ると、これら二つのコミュニケーションの性質はまったく異なっている。ポイントとなるのは情報が伝達される受け手の特質である。会話のような対面的相互作用において情報の受け手となるのは、通常、既知の特定の他者である。それゆえ何を話題として提供するかという情報選択を行う際——それは会話を途切れさせないような情報でなければならない——、これまでのコミュニケーションの履歴から相手の興味関心に合った情報を選ぶことは比較的容易である。対して、ネット掲示板のようなコミュニケーションにあっては、受け手はつねに不特定多数である。もちろん〇〇板、××板といったように主題によって掲示板の種類は分けられているが、ネット環境が整っている限りあらゆる人がネット掲示板にアクセスすることができる。この意味でインターネットのコミュニケーションはマスメディア・システムと共通点を有していると言える。

このことは情報の選択という点でも、インターネット・コミュニケーションにマスメディア・システムと同様の問題をもたらす。マスメディア・システムが情報／非情報というバイナリー・コードを用いて観察を行う際、そこで選択された情報はただの情報であってはならず、新奇性や時事性といった特性が必要とされることはすでに確認した。これは受け手が不特定多数であるため、誰しもが興味関心を持ちやすい情報を伝達しなければならないからである¹¹⁾。このことはインターネットについても言える。インターネットも情報の受け手は不特定多数であるため、意外性や新奇性をともなった情報を伝達することが必要となる。

しかしインターネット・システムとマスメディア・システムの類似性はここまでである。マスメディア・システムのプログラムの一つであるニュースとルポルタージュにおいて情報を選択し伝達する際、そこに大きな制限がかけられていた。それは伝達された情報が「真実」でなければならないということである。ニュースとルポルタージュには、「意外性」「時事性」「規則違反」といった基準のみならず、それが真実であるか否かという観点からも情報／非情報の選別を行うことが求められているのだ。これに対してインターネット・システムにとっ

11) それゆえマスメディアは視聴率、発行部数などの「量」に、コミュニケーションの成否を測る指標として多大な関心を示す。これはたんに営利上の問題（低視聴率だとスポンサーがつかない）というだけではなく、マスメディア・システムの特性という観点から理解しなければならない。

て真実／非真実という区別はさして重要ではない。なぜか——インターネット・システムでは接続／非接続の区別の方がはるかに重要だからである。インターネットの場合、マスメディア・システムのように真実の情報を伝達し続けるだけでは、システムは回らない¹²⁾。真実をいくら書き込んだとしても、後続のコミュニケーションが接続しなければこのシステムは作動を停止してしまうからだ。インターネットにときに目を覆いたくなるような差別的な発言や扇情的な物言いが横溢するのは、そうした情報は感情に訴えかけることで読み手の反応（共感であれ、反感であれ）を喚起し、次なるコミュニケーションの接続を容易にするからである¹³⁾。逆に、誰もが知っている正しい情報（真実）は反応のしようがなく、コミュニケーションの流れを阻害するため、インターネットにおいては流通しにくい。悪情報は良情報を駆逐する（Bad information drives out good）——ポスト真実の時代のグレシャムの法則である。

インターネットにおいて真実ではない情報が流され、共感や反感をともないながら瞬く間に流通するのは、これまで見てきたようなインターネットに固有のコミュニケーション特性によるものである。まとめると、接続／非接続をバイナリー・コードにしながらか情報の選択を行い、そうして選ばれた新奇性や意外性をともなった（かならずしも真実ではない）情報が不特定多数の他者に向けて伝達され、それに対する反応として接続／非接続の観点から選択された情報が不特定多数の他者に伝達され、さらにそれへの反応として……といった再帰的な構造をもつコミュニケーション・システム、それがインターネット・システムである。その意味でインターネットはポスト真実の時代ときわめて親和性の高いメディアであると言えるだろう。

【文献】

- 馬場靖雄，2001、『ルーマンの社会理論』勁草書房。
- Baraldi, Claudio, Giancarlo Corsi und Elena Esposito, 1997, *GLU: Glossar zu Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme*, Suhrkamp. (=2013, 土方透・庄司信・毛利康俊訳『ニクラス・ルーマン社会システム理論用語集』国文社.)
- 大黒岳彦，2006、『〈メディア〉の哲学——ルーマン社会システム論の射程と限界』NTT出版。
- ，2016、『情報社会の〈哲学〉——グーグル・ビッグデータ・人工知能』勁草書房。
- Habermas, Jurgen, 1981, *Theorie des kommunikativen Handelns*, 2 Bde., Suhrkamp. (=1985-1987, 河上倫逸ほか訳『コミュニケーション的行為の理論（上・中・下）』未来社.)
- Habermas, Jurgen / Luhmann, Niklas, 1971, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, Suhrkamp. (=1984-1987, 佐藤嘉一・山口節郎・藤澤賢一郎訳『批判理論と社会システム理論——ハーバーマース＝ルーマン論争（上・下）』木鐸社.)

12) 当然のことながら、インターネットの情報には「真実」が多々含まれている。われわれが主張しているのは、情報が真実であるかどうかを主要コードにしてインターネット・コミュニケーションは作動していない、ということである。

13) 社会学者の鈴木謙介は、初期の２ちゃんねるに典型的に見られた、反応を誘発するような情報（ネタ）と戯れるさまを「ネタ的コミュニケーション」と呼んでいる（鈴木 2002:211）。

- 池田純一, 2017, 『〈ポスト・トゥルース〉アメリカの誕生——ウェブにハックされた大統領選』青土社.
- 北田暁大, [2002] 2011, 『増補 広告都市・東京——その誕生と死』筑摩書房.
- Lippmann, Walter, 1922, *Public Opinion*, Macmillan Company. (=1987, 掛川トミ子訳『世論(上・下)』岩波書店.)
- , 1925, *The Phantom Public*, Transaction Publishers. (=2007, 河崎吉紀訳『幻の公衆』柏書房.)
- Luhmann, Niklas 1972, *Rechtssoziologie*, 2 Bde., Rowolt. (=1977, 村上淳一・六本佳平『法社会学』岩波書店.)
- , 1975, *Macht*, Ferdinand Enke Verlag. (=1986, 長岡克行訳『権力』勁草書房.)
- , 1983 *Liebe als Passion: Zur Codierung der Intimität*, Suhrkamp. (=2005, 佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛——親密さとコード化』木鐸社.)
- , 1984, *Soziale Systeme*, Suhrkamp. (=1993-1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論(上・下)』恒星社厚生閣.)
- , 1988, *Die Wirtschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp. (=1994, 春日淳一訳『社会の経済』文眞堂.)
- , 1990, *Die Wissenschaft der Gesellschaft*, Suhrkamp. (=2009, 徳安彰訳『社会の科学(1・2)』法政大学出版局.)
- , 1996, *Realität der Massenmedien*, 2. erweiterte Auflage, Westdeutsche Verlag. (=2005, 林香里訳『マスメディアのリアリティ』木鐸社.)
- 長岡克行, 2006, 『ルーマン／社会の理論の革命』勁草書房.
- 名部圭一, 2008, 「テレビ視聴のスタイルはどのように変化したか——能動的受け手とツッコミの変質」南田勝也・辻泉編『文化社会学の視座』ミネルヴァ書房, 129-146.
- Parsons, Talcott [1937] 1968, *The Structure of Social Action*, Free Press. (=1974-1989, 稲上毅・厚東洋輔・溝部明男訳『社会的行為の構造(1-5)』木鐸社.)
- 佐藤卓己, 2008, 『輿論と世論——日本的民意の系譜学』新潮社.
- 佐藤俊樹, 2008, 『意味とシステム——ルーマンをめぐる理論社会学的探究』勁草書房.
- Sunstein, Cass, 2001, *Republic.com.*, Princeton University Press. (=2003, 石川幸憲訳『インターネットは民主主義の敵か』毎日新聞社.)
- 鈴木謙介, 2002, 『暴走するインターネット』イーストプレス.
- 田中辰雄・山口真一, 2016, 『ネット炎上の研究』勁草書房.

(2017年12月7日受理)

The Media in the Post-truth Age: The Internet from the Perspective of Social System Theory

NABE Keiichi

The aim of this paper is to analyze “affective society” in the post-truth age from the perspective of social system theory as elaborated by German sociologist Niklas Luhmann. According to this theory, modern society is a functionally differentiated society to a high degree, where symbolically generalized media of communication such as money, power, truth and love have developed and each functional system observes the other functional systems or its environment through binary codes such as true/false (the system of science), legal/illegal (the legal system), and payment/non-payment (the economic system).

In his later life Luhmann analyzed mass media in terms of social system theory and insisted that the binary code of the system of mass media is information/non-information, which enables the system to select new information from its environment. New information selected in this system, however, is severely limited; it must be true. Then, what is the binary code of the system of the internet? We propose that it is connection/disconnection. Compared with the system of mass media, for the system of internet it is more critical how communication is connected to next communication, for disconnection of communication means the death of the system itself. On the other hand, it is less important whether information is true or not than in the system of mass media. This is why false or fake information is easy to circulate in the system of the internet. Bad information drives out good—Gresham’s Law in the post-truth age.

桃山学院大学

総合研究所紀要

Vol. 43 No. 3 2018. 3

〔共同研究〕

論 文

ポスト真実の時代のメディア

——社会システム理論から見たインターネット—— ……………名 部 圭 一 (1)

論 文

On Lenneberg Conjecture: Syntax as Calculus of F ……………ARIKAWA Koji (15)

「権利としての博物館」論序論

——これまでの博物館法改正を通して考える—— ……………井 上 敏 (33)

2016年度研究所日誌 …………… (45)



桃山学院大学総合研究所